早稲田大学大学院日本語教育研究科

博　士　論　文　概　要

論　　文　　題　　目

日本語オノマトペとその教育

申　　請　　者

三 上　京 子

２００７年　３月

博士論文概要

日本語は世界の言語の中でも、擬音語･擬態語などのいわゆるオノマトペを豊富に持つ言語の一つである。それらは文芸作品に限らず、日常生活の中で、特に話し言葉において頻繁に使用され、話し手の細かな心情を表したり、様々な事物の様態を生き生きと描写したりする際に欠かせない語群である。

では、これまでの日本語教育において、オノマトペはその使用頻度や重要性に見合うだけの十分な学習や指導がなされてきただろうか。例えば初級において「一本」、「一匹」などの「助数詞」が独立した項目として取り上げられることがあるのに対し、オノマトペは「犬はワンワンとなきます」など、ごく限られた形でしか提示されていない。ところが中級、上級と進むにつれ、学習者は授業で取り上げられる生教材や新聞・雑誌、テレビ番組などのメディア、および周囲の日本人の会話などの中にオノマトペが非常によく使われているということを知り、その数の多さとともに意味・用法の習得の困難さにも気付くのである。また指導する教師の側も、初級においてほとんど体系的に指導していなかったオノマトペを、中級以降どのように指導していったらいいかという問題、指導する際の適切な教材や有効な指導方法が見当たらないという現実にぶつかることになる。

筆者は、長い間日本語教育の現場で教えてきた経験から、オノマトペを学習者に指導することの必要性、学習者がオノマトペを学ぶための教材開発の必要性を強く感じながらも、日本語教育においてこのことが正面から取り上げられていないということに疑問を抱いてきた。日本語は語彙が豊富な言語であると言われる。そしてその中でも特に豊かな表現力をもつオノマトペを、学習者が使えるようになることは、積極的に支援されるべきことだろうと思う。そのためにはまず、教師がオノマトペを、豊かな表現をするための重要な語群として認識し、その特徴や一つ一つの語、特に基本的な語の意味・用法をしっかりと把握する必要がある。また、学習者にオノマトペに興味を持たせ、学習者がオノマトペについて知りたい、学びたいと思ったときに、適切な教材をリソースとして提供し、さらに教室活動の中でどうすれば効果的に提示していけるかという指導の方策を考えていかなければならないと思う。

以上の研究動機と目的の下に、本論文を次の６つの章から構成して執筆することとした。

第１章は、オノマトペとは何かという本研究の出発点ともなるオノマトペ定義の問題に取り組む。オノマトペの定義と分類、他の言語におけるオノマトペ、またオノマトペにおける音象徴、意味特徴、音韻・形態的特徴、統語的特徴、「語彙性」と「オノマトペ度」など、様々な観点から先行研究を概観し、その成果を吟味することによって、本論文における日本語オノマトペの範疇、すなわちどんな語をオノマトペと定義するのかということを明らかにする。第２章では、国語辞典、擬音語・擬態語辞典、日本語学習辞典などにどのようなオノマトペが見出し語として採録されているか、それらの辞書におけるオノマトペの意味・用法はどのように記述されているか、またそこにどのような問題があるかということを調査し考察する。第３章は、日常の言語生活においてオノマトペが実際どのように使用されているか、その使用実態を知る手掛かりを得る目的で、各種言語資料と日本語の初級・中級教科書を調査・分析し報告する。ここでの調査と考察は、第５章で日本語教育のための「基本オノマトペ」を選定する際の資料とする。第４章では、日本語オノマトペの教育に向けて、先行研究の知見もふまえつつ、オノマトペ指導の基本的な考え方とその必要性、オノマトペのいくつかの特徴に基づいた具体的な指導の方策についての考察を行う。続く第５章において、日本語教育の比較的早い段階からオノマトペを学習・指導することを前提とし、基本語彙に関する先行研究の成果と第３章で調査・分析した資料などを基に、日本語教育のための「基本オノマトペ」を選定し、試案として提示する。そして、最後の第６章において、第５章で選定した「基本オノマトペ」を学習・指導するためのリソース化を行う。リソース化の具体的な方法は、各オノマトペの用法・文例および詳しい意味の記述と会話例の提示である。このリソース化によって、外国人学習者の日本語オノマトペ学習および日本語教師のオノマトペ指導を支援することを目指す。

以上述べた本論文における研究動機とその目的がどのように達成されたか、以下に各章ごとの内容を記す。

第１章では、オノマトペに関する先行研究の知見をまとめつつ、日本語オノマトペを様々な側面から眺めてみた。しかしここで、オノマトペに関するあらゆる先行研究を吟味し、日本語オノマトペのすべてについて網羅的に記述できたわけではない。また、そのことが本論文で筆者が目指したことでもない。第１章で筆者が目指したことは、日本語教育におけるオノマトペの位置付けを確かなものにするために、まず、オノマトペとは何かという問題に取り組むことであった。そして、オノマトペの定義と分類、音象徴性、音韻・形態

的特徴、統語的特徴、またオノマトペの語彙化と他の語との境界の問題について考察した。この考察の過程で、オノマトペがたしかに「閉じた系」として、他の語と弁別されるべきはっきりした特徴を持った語群であることを改めて確認することができた。また、この考察から、オノマトペとはどこからどこまでを指すのかというオノマトペ語彙の範疇について、あくまで教育という立場から、本論文におけるオノマトペの定義を示すことができたと考える。

しかし、オノマトペや他の語群においても、また語彙に限らずどのような言語現象においても同様であると思うが、その範疇を定め定義付けすることは容易ではない。それは、すべての言語現象は本来連続体として捉えられるべきものであり、どこかで線引きできるようなものではないからであると考える。よって、本論文の第１章において日本語オノマトペを教育という観点から定義付けしたが、定義付けの目的や視点の違いによっては、日本語オノマトペをどのような語として捉えるか、またそれをどのように定義付けるかということもまた異なってくる可能性が残されていると考える。今後の課題としたい。

第２章では、日本語オノマトペが既存の辞書においてどのように扱われているかということを見るために、調査と考察を行なった。学習者が教科書や教材、または日常の言語生活の中でオノマトペに出会い、その意味や用法を知りたいと思った時、あるいは教師が学習者にオノマトペの意味や用法を説明したり、学習者の質問に答えたりしようと思った時、最も手近な方法は手元にある辞書で確認することであろう。辞書はそのような意味で、オノマトペ学習や指導の環境に欠かせないものの一つであると考えたからである。

調査の対象としたのは、国語辞典、擬音語・擬態語辞典、外国人のための日本語学習辞典である。ここでの調査の目的は二つあった。まず、それぞれの辞書にどんなオノマトペが見出し語として選定されているかということ。二つ目は、それらの辞書で、オノマトペの意味や用法がどのように記述されているか、またその記述は、オノマトペの学習や指導にとって必要かつ十分なものになっているかということである。

調査の結果、数種類の辞書において見出し語として採録されている語には、かなり相違があることがわかった。オノマトペが、その範疇を定めることの難しい語群として日本語に存在するという事実が、辞書の調査からも浮かびあがった。二点目の意味・用法の記述についての調査と考察は、学習の早い段階で出会う基本的な語や、学習や指導に困難を覚えることの多い類義語や多義語について行った。調査と考察の結果、日本語を母語としな

い学習者にとって、既存の辞書による意味記述や用例だけでは、オノマトペの意味・用法を理解し､運用していくための情報を得ることは難しいのではないかという結論に達した。

第３章では、日本語オノマトペが、実際の言語生活においてどのように用いられているかという、オノマトペ使用の実態を把握するために、各種言語資料と日本語初級・中級教科書について調査を行った。序章でも述べた通り、日常の言語生活の様々な場面において多用されているオノマトペが、従来の日本語教育においてその重要性に見合う扱いを受けてきたとは考えにくい。本章での調査とそれに基づく考察を通して、オノマトペが実際どのように使われているか、また日本語教科書のどの段階においてどのようなオノマトペが取り扱われているかを知ることで、オノマトペ教育の方策への手掛かりが得られるのではないかと考えたからである。

調査の対象としたのは、新聞記事、雑誌記事、シナリオ集、漫画という各種言語資料と初級・中級の日本語教科書である。それらの資料や教科書に見られるオノマトペにはどのようなものがあるか、また複数の教科書に扱われている語、各種言語資料において高頻度で用いられる語は何かなどの調査を行った。これらの調査とそれに基づく考察は、日本語教育においてオノマトペがどのように学習されまた指導される得るものかを知る上で、前提となる大切な情報であったと考える。今後も、同様の調査をより広い範囲で行っていきたい。特に、オノマトペは書き言葉ではなく、日常の話し言葉においてその使用が頻繁に見られることから、今回は調査の対象とできなかった自然談話資料やテレビ番組における談話資料等についても調査を行っていきたいと考える。日本語母語話者による日常会話コーパスの出現が待たれるところである。

第４章では、これまでの日本語教育において、決して十分な学習や指導がされていなかったと思われるオノマトペの教育について、様々な観点から考察した。始めに、日本語教育におけるオノマトペ指導、また基本オノマトペ選定に関する先行研究を概観し、次に、日本語教師や学習者にアンケートやインタビュー調査を行った。この調査の目的は、学習者や教師がオノマトペをどのように捉えているか、また、これまでどのように学習・指導してきたか､そしてオノマトペ教育に対してどのように考えているかを知ることであった。

次に、従来行われてきた語彙指導の方法論とそこで用いられる教材や指導法について吟味した。そして、これまでオノマトペ教育が十分に行われてこなかったと考えられるのは

なぜか、なぜ今オノマトペ教育が必要だと考えるのかという、オノマトペ教育の基本的な考え方と表現教育としてのオノマトペ指導の必要性を論じた。また、オノマトペの音象徴性、音韻・形態的特徴を学習と指導にどう援用できるかという観点からも考察した。

オノマトペの統語的特徴については、日本語中・上級教科書とオーセンティックな教材を題材とし、オノマトペが文中でどのような役割を果たすのか、それらは文中において必須の要素となっているのかという観点から調査と考察を行った。また、オノマトペは、言うまでもなく日本語母語話者の感性や身体感覚、すなわち五感と密接に関係している語彙である。そこで、多義であるオノマトペが複数の意味を持つにいたった過程と多義のネットワークを、認知言語学の観点から明らかにすることを試みた。

以上、第４章では、オノマトペの持つ様々な言語学的特性と、オノマトペ教育への方向性を明らかにすることができたと考える。特に、学習者と教師を対象に行った調査は、対象人数も限られたものであったが、オノマトペ教育に対する学習者や教師の生の声を聞くことができ、本研究の主眼である第５章、第６章に向けて非常に貴重な示唆が得られたと考える。今後は、学習者のオノマトペの学習状況やその習得過程なども研究の対象としていきたい。

第５章と、続く第６章は、本論文において筆者が目指した日本語教育のための「基本オノマトペ」の選定とそのリソース化である。さて、第４章までで、日本語オノマトペについてその定義の問題から使用の実態にいたるまで、また日本語教育におけるオノマトペ学習と指導の方策についても、様々な方向から調査・考察し論じてきたわけであるが、オノマトペの教育については、学習のごく初期の段階から中級、上級さらに超上級にいたるまで、語彙教育として多種多様な方策が考えられるところである。しかし、本論文において、すべての学習段階での教育について、また語彙教育として考え得るあらゆる方策について論じ、またそのための具体的な成果を提示することは不可能であると考えた。よって本論文では、筆者が、オノマトペ教育において今、最も必要であると考えたところの＜比較的早い段階からのオノマトペ教育＞の方策として、日本語教育のための「基本オノマトペ」の選定とそのリソース化を試みることとした。

第５章では、始めに「基本語彙」とは何か、日本語教育においてどのような語を「基本語彙」と考えるのかという点についていくつかの先行研究を概観し、本論文における考え方を述べた。また、８種の基本語彙先行研究の文献を資料とし、複数の文献に重複して選

定されているオノマトペを、本論文における「基本オノマトペ」選定のための基礎資料とした。次に、日本語教育における「基本オノマトペ」とはどのようなものかという、本論における基本オノマトペ選定に向けての考え方と選定のプロセスを述べ、その考え方とプロセスに従って日本語教育のための「基本オノマトペ」70 語を選定した。以下がその 70 語である。

あっさり	いらいら	うっかり	うろうろ	うんざり
がたがた	がっかり	がやがや	からから	がんがん
きちんと	ぎっしり	きらきら	ぎりぎり	ぐっすり
ぐっと	くるくる	ぐるぐる	げらげら	こっそり
ごろごろ	ざあざあ	さっさと	さっと	ざっと
さっぱり	さらさら	しっかり	じっくり	じっと
じろじろ	すっかり	すっきり	すっと	すらすら
ずらり	そっくり	そっと	そろそろ	ぞろぞろ
たっぷり	ちゃんと	どきどき	どっと	どんどん
にこにこ	のろのろ	のんびり	ばたばた	はっきり
ばったり	はっと	ぱっと	はらはら	ばらばら
ぴかぴか	びっくり	ぴったり	ふと	ふらふら
ぶらぶら	ぶるぶる	ふわふわ	ぺこぺこ	ぺらぺら
ほっと	ぼんやり	めちゃくちゃ	ゆっくり	わくわく

この 70 語は、あくまで日本語教育における学習・指導のために、基本的なオノマトペをリソース化するという目的で選定したものである。従って、この 70 語を中級レベルまでにすべて学習・指導することが望ましいという意味ではもちろんない。同時に、この 70 語以外のオノマトペを学習・指導することを妨げるものでもない。それは、特に中級レベル以上になると、語彙の学習の範囲や習得の過程は、個々の学習者の学習目的や学習環境によっても大きく異なってくることが想像されるからである。そのため、学習語彙のシラバスを定めることは、実際には大変困難なことであるわけだが、本論文では敢えてそのことに挑戦し、ここに試案として提示したわけである。今後は、この 70 語という語数、またその選定プロセスが適正なものであったかを再度検討し、基本オノマトペ選定に向けての考え

方とそのプロセスをより精緻化していきたいと考える。

本論文の最終章である第６章では、第５章で選定した「基本オノマトペ」70 語を、日本語学習者と教師のオノマトペ教育を支援する目的でリソース化し、本論文の成果として提示した。リソース化は、以下の４つの段階に分けて行った。

（１）オノマトペの「用法」の提示

始めに用法として、各オノマトペが文中でどのように用いられるかという統語的考察を行った上で、そのオノマトペが持つすべての用法を示す。用法を示す文例は、意味がわかる範囲でなるべく簡潔なものとする。この用法提示によって、学習者は、副詞用法であれば動詞や形容詞との共起関係、また「する」動詞になるか、形容動詞的用法あるいは名詞としての用法を持つか等、当該オノマトペの文法的働きの情報を得ることができる。

また、オノマトペのアクセントは第１拍頭高型である場合が最も多いが、用法によってはアクセント型が異なる場合がある。このことも、オノマトペを使用する際には重要な情報となるので、各用法についてどのようなアクセント型で発音されるのかということを記号で表示する。以下に、「ぺらぺら」「びっくり」を例として挙げる。

１．外国語が**ぺらぺら**だ。（平板アクセントのため、アクセント記号は表示しない。）

２．**ぺ⌝らぺら**よくしゃべる。（頭高）

３．大きな音がして**びっく⌝り**した。（中高）

４．**びっくり⌝箱をもらった**。（尾高）

（２）オノマトペが用いられる「文例」の提示

次に、その語が用いられる「文脈」を示すことが重要であると考え、これまでの辞書や教材における単文レベルの例文ではなく、「文脈」を伴ったより長い例文、または複数の例文を提示することとした。それが、文例と意味における「文例」である。ここで、各語が基本的なオノマトペということを考え、日本語の教科書・教材に現れた例文やオノマトペ教材等の解説に見られる用例を参考に、出来る限り平易な例文を提示する。各オノマトペが複数の意味を持つ場合は、その一つ一つの意味に対応する例文を挙げる。ただし、ここでは、文学作品等におけるその作家特有の用例や、非常に臨時的に用いられていると思われる特殊な用例などは対象としない。また、用例として辞書等に記述があるものでも、

日常的にあまり用いられていない用例は、学習者にとって習得の必要性が低いと考え、ここでは省くこととする。この「文例」によって、そのオノマトペが実際にどのような場面、状況のもとに用いられるかを示すことができると考える。

（３）「文例」の＜意味＞の記述

次に、それぞれの「文例」についてその＜意味＞を詳しく記述する。意味の記述は、できる限り平易な言葉を用い、かつ具体的に行う。すなわち、従来の辞書に見られるような同義語による置き換えや類義語による言い換えで説明する循環定義を避け、その語が実際どのように使われるのか、その語を使うときの場面や状況を含めて記述する。

ここでの記述方法は『コウビルド英語学習辞典』(1990，秀文インターナショナル）の方式を採用する。同辞書は、様々な素材に表れた現代英語のデータをコンピュータを用いて分析することにより、それぞれの語が実際どのように使われているかを明らかにした辞書である。最大の特徴は、従来の辞書で行なわれていたような、語の置き換えによる定義を避け、単語の意味を具体的な状況に即して文章をもって説明、何が主語にくるのか、どの前置詞をとるのかといった基本的な情報や、その単語の使われる場合や前後関係等を説明していることである。

（４）日常的な場面における「会話例」の提示

教材化の最後の段階は、会話例である。「会話例」は、日常生活の様々な場面において交わされると考えられる短い会話例を創作し、提示する。各会話例には、＜だれが＞＜だれと＞＜いつ＞＜どこで＞＜何について＞＜どんなことを＞話しているのかという会話の背景がわかるように、場面や状況、登場人物を設定し、記述する。また、会話特有の表現や、あいづち、フィラー等もなるべく自然に近い形で提示する。以下に、「基本オノマトペ」におけるリソース化の一例を示す。（紙幅の関係で、文例と意味２．３．と５．は省略している。）

【ぴったり】

用例

１．くつのサイズが**ぴったり**合った。

２．子供が母親に**ぴったり**とくっついている。

３．体に**ぴったり**した服を着る。

４．９時**ぴったり**に学校に来る。

５．この仕事は私に**ぴったり**だ。

６．これはプレゼントに**ぴったり**の商品です。

文例と意味

１．デパートの洋服売り場で、色とデザインがとてもすてきな服を見つけた。着てみたらサイズも**ぴったり**合ったので、少し高かったけれど、思い切って買ってしまった。

＜意味＞

洋服やくつのサイズが**ぴったり**合うというのは、大きすぎず、小さすぎず、サイズが本当にちょうどいいという意味です。洋服は少し大きくてもだいじょうぶですが、くつの場合は特に、サイズが**ぴったり**合っていると、歩きやすくて足も疲れません。

４．山田さんは、みんなと会うとき、いつも約束の時間に遅れてくる。でも、今日は、先生もいらっしゃる予定だと言ったら、約束の時間**ぴったり**に来た。

＜意味＞

約束の時間**ぴったり**に来る、というのは、例えば５時に会うと約束したとき、５時ごろ、つまり５時の少し前、４時 55 分とか、５時ちょっとすぎではなく、ちょうど５時に来るということです。

６．友達が結婚するので、プレゼントを買いにデパートに行った。何をプレゼントしたらいいかわからなかったので店員に相談したら、結婚のお祝いに**ぴったり**の商品をいくつかアドバイスしてくれた。

＜意味＞

だれかに何かをプレゼントするとき、何をあげたらいいか、どんなものが喜ばれるかいろいろ悩みます。そんなとき店員に、どんな相手に何のプレゼントをするか話して相談すると、相手が喜ぶようなとてもいいプレゼントの例、つまりそのプレゼントに**ぴったり**のものを教えてくれます。

会話例

１）［デパートのくつ売り場で］　Ａ：客　Ｂ：店員

Ａ：あのう、これ、ちょっとゆるいんですけど、もうワンサイズ、小さいのありませんか。

Ｂ：はい、これですね。今、お調べしてまいりますので、少々お待ちください。・・・
　　こちらが一つ小さいサイズになりますが。

Ａ：ああ、いいですね。これなら**ぴったり**です。じゃ、これ、ください。

Ｂ：かしこまりました。

２）［結婚式で］Ａ，Ｂ：大学時代の友人同士

Ａ：ねえ、みちこさんと彼、本当にすてきなカップルだよね。

Ｂ：うん、あの二人、大学１年のときからほんとに仲がよかったもんなあ。性格も趣味も
　　考え方もほんとに合ってるみたいだよ、お互いに。

Ａ：いいわね。あんなふうに、**ぴったり**の相手と結婚できるなんて・・・。

第６章において提示したものは、そのまま教室に持ち込まれて学習・指導の対象とされるようなものではなく、先にも述べたように、あくまでも学習者の自律学習と教師の指導を支援するためのリソースである。いわば、オノマトペ学習のためのハンドブックとして、利用されることを期したものとして理解されたい。

今後は、より高いレベルでの学習や指導に向けて、語を選定し引き続きリソース化を行なっていく予定である。またオノマトペに限らず、中級以降の学習者にとってその理解や運用が難しいとされる一般の副詞についても同様のリソース化を行っていきたいと考える。

なお、このリソース化の一部は、国立国語研究所が行っている e-Japan 事業のインターネットサイト、「日本語を楽しむ―表現豊かな擬音語・擬態語―」

http://jweb.kokken.go.jp/gitaigo/index.html　において平成 16 年度より公開中である。サイトを見た学習者また教師から様々なフィードバックを得ることができ、またその学習や指導の一助となることができるなら、研究者としてまた現場の教師として望外の喜びである。

以上